様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２７０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０１９２７

研究課題名（和文）近代日本の手作りとジェンダー　－大量生産の時代における趣味のジェンダー化－

研究課題名（英文）Handmade and Gender in Modern Japan　- Genderification of hobbies in the era of mass production -

研究代表者
神野　由紀（Jinno, Yuki）

関東学院大学・人間共生学部・教授

研究者番号：８０３５０５６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：　大量生産の既製品が安易に購入できるようになった20世紀半ば、自己表現としての手作りが大衆化していく。本研究では雑誌調査などから、女性の手芸に対して男性は工作と呼ばれる手作り趣味が興隆した背景を明らかにした。男女の手作りは近代的なジェンダーの枠組みの中で、それぞれの領域を発展させていった。両者の関係は女性解放運動の影響、あるいは男性の家庭生活への接近などにより揺れ動きつつも、それを完全に越境することが困難な時代が続いた。しかし今日、こうしたジェンダーの枠組みを超えるような新たな手作りの文化も生まれてきていることも明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In the mid-20th century when mass-produced ready-made items became readily available for purchase, handmade as self-expression became popularized. In this research, from magazine survey etc., men revealed the background that handmade hobbies called “kosaku” rise against female “shugei”. Male and female handmade has developed each area within modern gender framework. There were also cases where handmade gender was exceeded due to the influence of women's liberation movement and approaching men's family life.But handmade was difficult to become completely gender free.Today, it is also clear that a new handmade culture beyond such a gender framework has also been born.

研究分野：デザイン学

キーワード：手作り　自作　手芸　工作　ジェンダー　ＤＩＹ　近代日本

１．研究開始当初の背景

これまで女性を中心とした「手芸」と、男性を中心とした「自作」に関する文化研究については、それぞれの研究成果がまとめられてきた。しかしジェンダーの問題として包括的に考察されることはなく、さらに学問領域もメディア社会学、芸術学、家政学などで別個に進められてきた。これらを一つの場で「手作り」という視座を共有しつつ議論すべきであると考えられた。男女それぞれの趣味を相対化し、これまで自明なものとして疑うことのなかったモノとそれをめぐるジェンダー的な意識の生成過程を明らかにする必要があった。同時に、生産労働ではなく趣味としての手作り行為の中で顕著に見られる「過剰さ」「執着」といった特徴は、男女双方の趣味に通底する。大量生産の時代、大衆が「つくる」ことで自己の表現を希求するに至った現代社会の特徴を明らかにすべき、というのが本研究に着手する背景である。

２．研究の目的

大量生産の時代、安価な既製品が気軽に購入できるにもかかわらず、なぜ未だに多くの人々が「手作り」に執着するのか。日常の様々な局面において近代的なジェンダーの枠組みが顕在化していく戦後日本で増加した専業主婦は、家事労働が軽減される中で手芸に熱中するようになる。主婦に限らず女子中高生も含め女性たちには、自らの周囲を手作りで自分好みにカスタマイズしようとする傾向が今日においても顕著に見られる。一方で男性においても電化製品や鉄道模型を初めとする自作趣味に没頭する人々が輩出されてきた。男女で異なる手作りの志向は、どのような社会的背景から生み出されていったのか、モノの氾濫する大衆消費社会を理解する鍵として、ジェンダー的視座から「つくることの意味」と「つくられたものの意味」を問うことが本研究の目的である

３．研究の方法

本研究は、女性の手作り文化を主に扱うＡ班と、男性の自作文化を主に扱うＢ班にメンバーを分け、作業を進めた。当初は共同研究者各自の視点で考察を進めていく予定であったが、研究を進めていく中でより統一した視点をとる必要が出てきた。このため共通資料を設定し、それを軸に個々の研究に展開するという手法をとることになった。男女とも、幼少期の手作り体験がその後の趣味に大きな影響を与えていると考えられることから、Ａ班では『ジュニアそれいゆ』、Ｂ班では『子供の科学』という、ともに戦前戦後の日本の少年少女の手作り文化に大きな影響を及ぼした雑誌の調査を全員で行った。誌面での手作り記事の詳細をデータ化し、全員で情報を共有した上で各自個別の調査を補足しつつ問題関心につなげる、という手法をとった。予定は 1970 年代以降の状況を中心に考察することになっていたが、既製品が主流となる 1970 年代以降に本格化する手作り趣味に至る背景として、1950 年代～60 年代の少年少女の手作り志向を基本調査として徹底して行った。

４．研究成果

（１）共通資料調査の概要

本研究では、少年少女期に手作りの趣味に大きな影響を与えた次の 2 誌について、全員で調査を行い、個々の研究の前提となる共通資料とした。調査の結果は以下の通りである。

① 『ジュニアそれいゆ』

戦前から『少女の友』の挿絵で人気を集めていた中原淳一は戦後、自身の雑誌『それいゆ』『ひまわり』『ジュニアそれいゆ』を次々と創刊した。中でも『ジュニアそれいゆ』は、刊行期間は短いものの、10 代の少女たちにそれまでになかった「ジュニア」という概念を用いて、その後の彼女たちの生き方の指標となるような生活規範、美的感性を誌面で説き、中流上層家庭の少女たちに人気を博した。全 39 号（1955‐1960、ひまわり社）の記事内容（記事総数 1874）の特徴は表 1 の通りであるが、小説など文学的な読み物が最も多く、その他　芸能人・読者モデルの紹介、ファッション情報などが目立つが、読み物記事と同じくらい毎号目立っていたのが手作りに関する様々な記事であった。さらにこの手作り記事の内訳は、洋裁・和裁 101、衣服以外で針と糸を使う手芸 198、その他木工など工作 131 となり、既製服への移行期を背景に、衣服以外の手芸、さらには工作などの記事が多くなっている事実が確認できた。

また『子供の科学』と対照的な結果となったのが、書き手の性別である。男性 946、女性 539、不明 490 と、男性の書き手が非常に多く、中原をはじめ、代表的な挿絵画家や手芸作家はほとんど男性であり、少女に対して美しい暮らしを啓蒙し、可愛いデザインを生み出していったのは男性によるものであることがわかった。

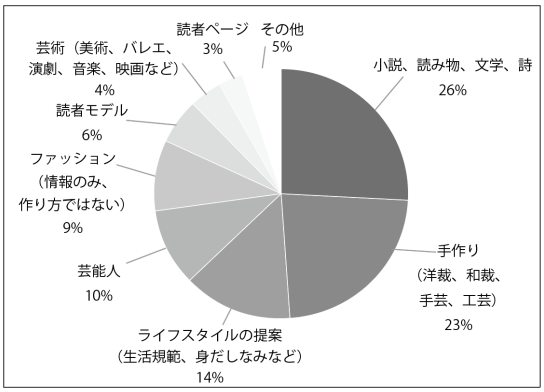

図１　『ジュニアそれいゆ』記事内容

② 『子供の科学』

『子供の科学』は、知られるように 1924（大正 13）年に、現在の誠文堂新光社の前身にあたる子供の科学社から、原田三夫を中心にして刊行された雑誌である。まさに日本を代表する科学雑誌であるとともに、今日でも刊行が続けられており、その点でも、歴史的な経緯を追う上では、最適の分析対象といえよう。

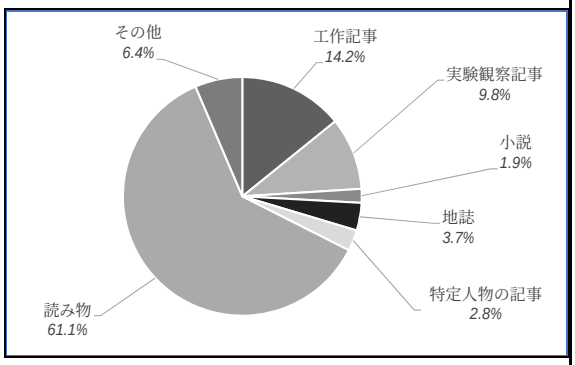

図２ 『子供の科学』の記事内容（n=15250、1924～1960 年分）

本研究では、戦前／戦中／戦後に及ぶ時期における変化に注目するために、1924 年の創刊号から 1960 年までの全号の分析を行った。該当する記事の件数は、15250 件であった。記事内容に着目すると、「読み物」が 61.1%と過半数を占める一方で、次に「工作記事」が 14.2%を占めているのは注目に値しよう。刊行時期が異なるため、単純な比較は難しいが、『ジュニアそれいゆ』と比べると、「読み物」の割合が多く「工作記事」の割合が少ないが、ここでいう「工作記事」は様々な機械や乗り物の類に関するものであり、後の工作趣味や鉄道趣味へとつながっていくひとつのプロトタイプとして理解できよう。

さらに『ジュニアそれいゆ』と象徴的な対比をなしていたのは、「書き手の性別」であり、「その他・不明」が 40.7%と多かったため、この点では注意が必要だが、「女性」と明示されていたものはわずかに 0.4%であり、事実上ほぼ男性によって占められていたと解釈して間違いないだろう。さらに度合いの高まった、この極端なまでの女性の少なさは、時代によっても変わらない傾向であった。

（２）男性と手作り

B班では『子供の科学』の記事内容の分析を中心に、戦前、戦中、戦後の模型工作の興隆を明らかにした。

① 『子供の科学』における工作記事（辻、塩谷）

『子供の科学』では工作に関連する記事が 2163 件あり、全期間を通して一定比率を保って存在していた。

工作記事における、「登場するヒト、モノ」と「年」のクロス集計を行った結果、工作の対象として「ラジオ・無線機」「実験器具、工作器具など」の値が無視できないものの、特徴的なのは「軍艦」「その他の船舶」「戦闘機」「その他の飛行機」「戦車」「その他の自動車」「鉄道」「その他の乗り物」といった、乗り物に関連する項目の数値が全体を通じて大きいことがわかった。

乗り物の種別ごとにその通時的推移は様々である。基礎集計結果の中でも、軍事的要素のある記事は戦後になって極端に減少したが、工作記事における「軍艦」「戦闘機」「戦車」についてもその推移はドラスティックであり、同様の傾向が見える。その中でも「鉄道」の特殊性は図-1 のように目立っており、戦中において軍事的なものとしての役割をある程度担わされながらも、戦後に入っても存在感を保ち続けることになる。大きな社会変動の中で、結果的に鉄道が工作の主役として立ち上がってきた様子がここに確認できた。

② 戦時期における少年の工作（松井）

1937 年の日中戦争以降、総力戦体制に入っていった日本では、「科学する心」というスローガンのもと、国民学校での模型教育が行われた。また、国家体制と連動するように、戦時下の「少国民」向けの雑誌では軍事色を強めた記事が多くなっていく。その典型が、軍事化した科学として、兵器を扱った記事である。

こうした動向のなかで、この時期の『子供の科学』でも、軍事関係の記事や兵器を題材にした工作記事が目立つようになっている。実際、上記の辻・塩谷による『子供の科学』工作記事の量的分析結果からは、40 年代前半において、工作記事のなかでの「軍事関係の要素」「戦闘機・飛行機」「模型」の割合の高さが顕著であることが明らかになっている。それをふまえて、松井は、本格的な総力戦体制となった 40 年代前半にしぼって『子供の科学』の詳細な質的分析を行い、関連資料や当時の歴史的背景をふまえて考察した。

その結果、まず戦時期の『子供の科学』の位置について、国民学校での工作教育は工夫や観察力、創造力を重視したが、こうした主張は実は同誌が創刊以来行ってきたもので、戦時期に至って国策と結果的に同じ方向になったことがわかった。

また、『子供の科学』における軍事と工作の結びつきに関しては、模型飛行機の重視と、資源不足ゆえの「科学」の必要性、現在（あるいは戦時下が継続する未来）のための工夫、などの主張が展開されていた。さらに、そうした主張が、「少国民」の研究心や好奇心を涵養し、それは科学的知識をもち主体的に考えられる兵士の育成につながるという論理に裏打ちされていたことが明らかになった。

③ 戦後の航空模型におけるミリタリズムとの距離（佐藤）

佐藤は 1952 年に創刊された航空雑誌『航空ファン』（航空ファン社から後に文林堂）

を手掛かりに、男性中心の「手作り」文化としての模型製作が戦後初期どのように展開されたのか、そしてそこにいかなる意味付けがなされたのかを検討した。その結果、当時の航空雑誌が、戦時期の教育や軍事と結びついた科学雑誌の文脈を引きずりながら、航空模型のあり方を戦後社会のなかで模索する様子が明らかとなった。
『航空ファン』の編集長は、戦時期の誠文堂新光社の雑誌（『日本理科少年』、『航空少年』）の編集に携わり、また読者や書き手も『航空ファン』の誌面上で『子供の科学』などでの模型作りに言及するなど、戦後初期の航空雑誌は『子供の科学』などの誠文堂新光社の科学雑誌が担ってきた工作文化の影響を色濃く受けたものであった。それに伴い、航空雑誌上でも模型製作について当初は、科学雑誌同様に「科学」「航空知識の涵養」としての「実用」的な意義が強調された。他方で「実用」性を備えたミリタリズムが忌避された占領期を経た展開として、「趣味」としての価値を提示する論者や、「実用」性から離れ過去の戦闘機を懐古する読者の姿も見られるなど、「実用」と「趣味」の間で揺れ動く模型製作の状況がみられた。こうした戦後初期の航空雑誌上で展開された模型製作のあり方は、その後「実用」としての含意が後景化し「趣味」化する過渡期の姿として位置づけることができよう。

（3）ジェンダーの枠組みを超えた手作り

強固なように見えた手作りのジェンダー化であるが、調査の課程で従来のジェンダーにとらわれない手作り文化が生まれてきたことも明らかになった。

① 日曜大工／DIY にみる男性のものづくり趣味とジェンダー（溝尻）

日曜大工は、1950 年代に発生し 1970 年代頃から広く使われるようになったことばである。元々は高度経済成長期の職人不足を背景に、家の設備の修繕や家具等の製作を自分自身で行う営みを指していたが、次第に男性による家庭内でのものづくり趣味を指すことばとなった。さらに DIY（Do It Yourself）というアメリカ的な消費文化のイメージを纏ったことばとも交錯しながら、日曜大工は趣味として定着していった。

溝尻は、日本において日曜大工ということばが広く流通するようになった 1970 年代を対象に、その営みがどのように生まれ、変容したかを明らかにした。具体的には当時の趣味雑誌の分析を通して、当時の男性によるものづくりがどのような営みとして語られたかを記述した。加えて同時期の海外における DIY の拡大過程にも焦点を当て、ものづくり趣味のグローバル化とローカル化、そしてそこに含みこまれるジェンダーのありようについて、考察を行なった。

② DIY 文化としての初期ケーブルテレビ（飯田）

飯田は、戦後日本におけるケーブルテレビ（以下、CATV）の自主放送を、（男性中心的な）「自作文化」と（女性中心的な）「手づくり文化」の混淆文化と捉え、ジェンダーの観点を補助線として、その形成と展開の過程を編み直した。

CATV の自主放送は従来、「コミュニティメディア」「地域メディア」「パブリックアクセス」といった〈理念〉にもとづいて、その社会的意義が論じられてきたが、本研究ではこれまで等閑視されてきた趣味文化としての側面を掘り下げ、現代のメディア表現につながる水脈をたどった。

具体的には、1960 年代における郡上八幡テレビ（岐阜県）と新紀テレビ（和歌山県）の活動、1970 年代に開局した下田有線テレビ放送（静岡県）、東伊豆有線テレビ放送（同）、津山放送（岡山県）などを事例として、それぞれの地域の生活に深く根ざした独自性（＝差異化）について考察した。たとえば、多くの自主放送が地域社会における有用性を前景化させていたが、津山放送の試みは、大衆消費社会における DIY 的な表現活動として特徴づけられる。電気技術という面では男性中心の自作文化を継承しつつ、そこに女性たちが積極的に関与していったことで、各局でそれぞれ独自の手づくり番組が生まれていたのである。

③ 「手作り鉄道」に関する調査（塩見）

塩見は鉄道愛好者が主体的に作り・動かす「手作り鉄道」の事例として、大阪府に所在する「桜谷軽便鉄道」に対する調査を行った。同鉄道はいずれも手作りの軌道と車両からなる、日本では他に類を見ない乗車可能な庭園鉄道である。オーナーの持元節夫氏（1927 年生まれ）は、少年時代から鉄道と電気工作への興味をもっていた。これは当時の少年文化の趨勢を反映したものである。電気関係の仕事を退職後に、電気技術を応用した庭園鉄道の自作をはじめた。

現在月 1 回の運転会が行われており、多くの親子連れが訪れる。乗りに来てくれる人がいることは持元氏にとって庭園鉄道を続ける動機付けとなっている。また運転会にはボランティアスタッフの存在が欠かせないものとなっている。ここには遊びに来ていた子供（少年）たちがスタッフとして関わり続けるという関係が見られる。ジェンダー・世代文化を反映した個人ベースの趣味的生産物が、子供たちの人気を得ることで公共性を帯びた「地域社会の資源」へとその意味あいを拡張したという点で、桜谷軽便鉄道は特筆すべき手作り趣味実践のあり方だといえる。

（4）まとめ

大量生産が本格化していく 20 世紀後半、手作りは個人の趣味となった。しかしその趣味には、旧来の性別役割分業を反映しつつ、強固なジェンダー・デバイドがなされた。近代的なジェンダーに批判が強まる風潮の中

でも、こうした手作りのジェンダー化は残っていたという事実は、個人の趣味というレベルにおいては、幼少期から自らの身体に刻まれた「つくる」記憶がいかに根強いかということを示しているといえる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6 件）
①山崎明子、モンデンエミコの「刺繍日記」―現代日本におけるテキスタイル・アート6、『美術運動史研究会ニュース』、170 号、2017（査読無）
②山崎明子、手芸文化の現在をみつめるために、『民博通信』157 号、2017、22－23、doi/10.15021/00008482（査読無）
③山崎明子、手芸で社会とつながる――大阪万博の「童心曼陀羅」『月刊みんぱく』41 巻 11 号、2017、18－19（査読無）
④山崎明子、戦時下の手芸―十五年戦争期における手芸文化と「手芸」の社会的意味―『未完成―企図／作品／芸術家―』、2018、151－163（査読無）
⑤辻泉，塩谷昌之、男性的趣味の形成と変容――戦前／戦中／戦後の『子供の科学』の内容分析から工作趣味，鉄道趣味を考える――『中央大学文学部紀要 社会学・社会情報学』第 273 巻／第 28 号、2018、1－27（査読無）
⑥神野由紀、近代日本のデザインとジェンダー　―手作りインテリアの意味をめぐる考察―、『デザイン理論』72 号、2018 年 8 月掲載決定（査読有）

〔学会発表〕（計　3 件）
①溝尻慎也、日本における日曜大工趣味の生成と展開、第 89 回日本社会学会大会、2016 年 10 月 8 日 九州大学伊都キャンパス
②神野由紀、大量生産の時代における手作りのデザインとジェンダー、意匠学会第 232 回研究例会、2017 年 11 月 18 日　大阪工業大学梅田キャンパス
③中川麻子、明治・大正時代の女子教育における刺繍、共立女子大学博物館記念招待講演、2017 年

〔図書〕（計　3 件）
①松井広志『模型のメディア論：時空間を媒介する「モノ」』青弓社、2017、242
②大塚英志『動員のメディアミックス：〈創作する大衆〉の戦時下・戦後』松井広志「戦時下の兵器模型と空想科学図解：戦後ミリタリーモデルの二つの起源」、思文閣出版、2017、520（132-156）
③本田由紀、中村高康編『教育社会学のフロンティア』岩波書店、今田絵里香「教育社会学と歴史研究－移動・選抜・社会史・ジェンダー史の視点から」2017、330

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

○取得状況（計　0 件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
神野　由紀（JINNO, Yuki）
関東学院大学・人間共生学部・教授
　研究者番号：80350560
(2)研究分担者
①飯田　豊（IIDA, Yutaka）
立命館大学・産業社会学部・准教授
　研究者番号：90461285
②辻　泉（TSUJI, Izumi）
中央大学・文学部・教授
　研究者番号：00368846
③中川　麻子（NAKAGAWA, Asako）
大妻女子大学・家政学部・准教授
　研究者番号：60468329
④溝尻　真也（MIZOJIRI, Shinya）
目白大学・社会学部・講師
　研究者番号：50584215
⑤山崎明子（YAMASAKI, Akiko）
奈良女子大学・生活環境学部・准教授
　研究者番号：30571070

(3)連携研究者　なし

(4)研究協力者
①　塩谷昌之（SHIOYA, Masayuki）
東京大学大学院博士後期課程
②　塩見翔（SHIOMI, Shou）
関西大学大学院博士後期課程
③　松井広志（MATSUI,Hiroshi）
愛知淑徳大学・創造表現学部・講師
④　佐藤彰宣（SATO, Akinobu）
立命館大学・産業社会学部・非常勤講師
⑤今田絵里香（IMADA, Erika）
成蹊大学・文学部・准教授

＊所属名称、役職などは 2018 年 3 月末時点のもの